
呪の一族

霧野ミコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪の一族

【Nコード】

N0168D

【作者名】

霧野ミコト

【あらすじ】

くだらない貴族にくだらない王、そして、くだらない国。そして、それをただ指をくわえて見る事しか許されない私。そんな私に舞い込んだ縁談。呪われし一族との縁談。果たして、その縁談の真意は？それを、私には解き明かせるのだろうか。

忌まわしき一族。

呪われし一族。

呪印の一族。

魔王の落胤^{らくいん}たる一族。

そう呼ばれる一族が存在する。

その一族とは、ミネルヴァ公爵家。

黒の瞳と黒の髪を持つ一族。

その起源は、現在の中央大陸の覇者であるルードヴィツヒ王家が興る以前よりも存在していた。

そう言われるほどの旧家である。

ただ、その忌み嫌われている一族が今もなお存続していられるのは、ただ古いだけでなく、恐ろしく強大な力を持っているからである。

現在の領地、軍事力は軽く小国を凌駕^{りょうが}しており、ここまでの力を持つている貴族をややすとは潰せない。

へたに刺激して、かみつかれて、大損害を受ける可能性が十二分にある。

けれど、その一族は、それだけではない。

遠い昔についたはずのもの。

錬金術を扱うものすらいるのである。

錬金術。

全ての物質を思い通りに変換する技術。

当然ながら、人間に出来る事ではない。

すでに、神の領域である。

けれど、それを扱うものがある。

それは、周囲にとっては恐怖でしかなく、何をされるかわかったものではない。

そして、それゆえに、ミネルヴァ公爵家が忌み嫌われる事になった、

主因でもあった。

「相変わらず、王宮は俗物の臭いでたまらんな」

私は、隣にいる男、筆頭執事であるキツシアにこぼした。

いつもの事だが、今の私は、王宮主催の宴に来ている。

一応、この国の貴族である、私も出席していた。

とはいっても、下流貴族の当主、しかも、年端の行かない子供である私は、会場の端に追いやられてはいるが。

まあ、だからといって、中心に行きたいとも思わない。

あんな、腐臭だらけの世界にいきたいと思えるわけがない。

「仕方ありませんよ。だいたい、この国の王自体が、快楽に溺れた愚か者ですから」

キツシアも同じようで、厳しくそう切り捨てる。

だが、それもまた事実。

この国の王は、どうしたら、そこまで汚く存在できるのかが不思議なぐらい、愚かな王なのである。

それは、近隣諸国の間でも有名な事。

おかげで、国力もだいぶ落ちている。

それでも、他国から侵略されたりしないのは、落ちてもまだまだ簡単に食いつぶせる国ではないからだ。

だからこそ、愚かであるのかもしれない。

潰される事など露と思っただけから。

「ならその愚か者に頭を下げなくてはならない私は、一体何になるだろうな」

けれど、それなら、私は一体何なのだろう。

愚か者だと分かっている、それでも頭を下げる私は何だ。

やはり、私もただの愚か者なのだろうか。

「私の誇り高き主人です」

そんな私の内心をわかったのことはのだろうか、キツシアはにこりと笑わず、そう言う。

その顔には、そんな自明な事をなぜ問う。
そう浮かんでいるようだ。

もちろん、それは単なるごますりみたいなものだろう。
自分の事は、自分自身がわかつている。

「そうか。それを聞いて安心した」

だが、それでも、嬉しかった。

もちろん、ごますりを聞いたからではない。

この男以外に言われたとしても、きっとそんなふうに思わないだろう。

この男だからこそ、意味がある。

この風変わりの筆頭執事であるキツシアだからこそ。

キツシアは最初から我が子爵家に使えていたものではなかった。

素性の知れない流れ者だった。

もちろん、私の両親は見向きもしなかった。

けれど、私は違った。

この男の溢れんばかりの才覚を見てしまったからだ。

キツシアの見る世界は、全く別のものだった。

私が常々愚かだとおもった国王ともその他の貴族とは違った。

常に虚構の世界を見ていた。

世界の真理を見ていた。

だからこそ、私は欲しくなった。

私は、すぐに召抱えた。

もちろん、両親は反対したが、それも無理やり押し切った。

両親の反対を押し切ってまで欲しい人材だった。

最終的には、なんとか了承を貰ったが、もちろん、私の侍従でしかなかった。

それが両親の最高の譲歩だった。

けれど、それで十分だった。

キツシアは私が想像した通りすぐに我が家でのし上がり、気がつけ

ば、筆頭執事になっていた。

そして、その頃には、両親も若くして死に、私が当主となっていた。まあ、それを見て、陰謀だというものもいたが。

もちろん、信じてはいない。

そんなことをしなくても、確実に筆頭執事になっていた。ならば、わざわざ面倒な暗殺などをする必要性などない。

それに、キツシアは、殺しはしない。

子供である私とて、子飼いの手のものがいる。

その者の情報と私自身で手に入れた情報の中で、キツシアは殺しはしていない。

もちろん、戦や動乱の時は少々機会はあったがそれ以外のときはしない。

どこまでも効率的に考え動く人間だが、殺生は好まない。

そういう部分がある。

だからこそ、私は彼を選んだ。

そして、それと同時にキツシアの主人に相応しい人物になろうと思ったのだ。

「それよりも、旦那様もそろそろ身を固めてみてはどうですか？」
パーティも佳境に入り始めた頃に、不意にそうキツシアが切り出した。

「貴方様も、もう24。お世継ぎの事も考えなくてはなりません」

そういうキツシアの顔はいつもよりも、やや真剣味がある。

まあ、キツシアの気持ちも分からないでもない。

今の我が子爵家には、もう私以外に、直系の子はいない。

もちろん、親戚がいるにはいるが、直系ではない。

血が途絶えるということになるのだ。

それだけは、どうしても、避けたいのだろう。

「ならば、適当にお前が見繕ってくれないか？お前の目なら間違いない」

当然、私にだってそれぐらいはわかっている。

ただ、今まで機会がなかったただけだ。

力を蓄えなくてはいけなかった。

この腐敗しきっている今だからこそ、力をつけなくてはいけない。

何があっても、自分の領地を、そして民を守るために。

だからこそ、ゆっくりと時間をかけて、蓄えてきた。

もちろん、有力な家の娘との良縁があれば、そのままということもあつただろうが、それは叶わなかった。

やはり下級貴族では相手にはされない。

もちろん、たまに私たちの動向に気がつき、縁談を持ってくるものもいるが、それも全部取り込むための伏線でしかない。

それが分かっている、受けるわけにもいかなかった。

だから、今まで暇がなかったのだ。

だが、今は違う。

ある程度力はある。

それこそ、そんじょそこらの中流貴族に匹敵するだけの物は持っている。

だから、今なら取り込まれることはない。

まあ、もちろん、キツシアはそんな危険なものを選んだりはいしないだろう。

キツシアの目は確かだ。

他の誰よりも人を見抜く目を持っている。

だから、この男に任せれば大丈夫だ。

もちろん、完全にキツシア任せにはしないが。

最終的には、自分で結論を出すつもりでいる。

「そうですか。分かりました。なら、私のほうで適当に見繕わさせてもらいます」

キツシアは、私の答えに対して、そう頷くと、私の傍から離れた。

そして、パーティもそれに習うかのように、終わりを迎えた。

それから数週間後のことだった。

相手が見つかったとの報告を受けたのは。

肖像画を見た感じは、なかなかの美女だった。

いや、まだ年のころは、20を超えてないところを考えれば、その表現では少しおかしいか。

まあ、それでも、年を重ねれば、間違いなくそうなることが約束されてそうな相手である。

もちろん、容姿に対しては、何の不満もない。

むしろ、こんな相手が妻となるのだ、喜ぶべき事である。

だが、素直にそう思えない問題もある。

確かに、肖像画にかかっているとおりならば、美女である事は違いない。

ただ、その容姿の一部に問題があるのだ。

黒髪と黒瞳。

そう、あの有名な一族、ミネルヴァ家の血筋を彷彿とさせるものだったのだ。

そして、その予想を全く裏切る事無く、キツシアはこう答えたのだ。
「ミネルヴァ家の唯一の直系嫡子である一人娘のサレイユ姫様です」と。

その言葉を聞いた瞬間、気が違えたかと思った。

ミネルヴァ公爵家。

それは、この大陸にいるものなら知らぬものはいないとまで言われるほどの古家。

そして、それと同時に強大な力を持つ一族。

下手に関われば、自分の身どころか、周囲まで食われかねない一族だ。

それだけでも、十分度肝を抜かれたと言うのに、その相手が直系の嫡子だとは。

何の装備もなしに、腹をすかせている猛獣の前に突っ立っているようなものだ。

あつさりと食われるだけだ。

「キツシア、お前は何を考えて、こんな馬鹿げた縁談を持ちかけた？」

私は、目の前にいるキツシアを睨むようにしてみる。

期待を裏切られたような感が否めない。

キツシアに任せれば、ある程度まともな相手を探し出してくる。

そう思っていたのに、だ。

「当然、旦那様の、このドルバ子爵家のことを考えてでございます。」

「

そんな私の事など見えていないのか、それともはたまたどうでもいいのか、冷静に答える。

「つまり、お前は、我が子爵家はミネルヴァ公爵家に取り込まれればいい。そう思っているのか？」

もしかすると、キツシアなりに、考えているところがあるのかもしれない。

けれど、私にはそれが全く予測つかない。

だからこそ、それが、逆にさらに腹立たしい。

「いえ、まさか、そんな事があるはずがないでしょう。むしろ逆です。私はミネルヴァ公爵家を取り込むために、この縁談を持ちかけたのです。」

そして、その推測は正しく、キツシアはそう冷静に答えた。けれど、それはまた同じくして、馬鹿げた事ではあったが。

それでも、私は縁談の話を受ける事にした。

別に、自暴自棄になったわけではない。

キツシアの言葉を信じただけのことだ。

キツシアはミネルヴァ公爵家を逆に取り込むといった。

もちろん、普通に考えてそんな事は到底不可能だ。

いくら力を蓄えたとは言え、ミネルヴァ公爵家と対抗できるわけではない。

素手で熊に真正面から戦いを挑むようなものだ。

ただ、それを分かっている、キツシアが受けたのだから、それなりに秘策があるのだろう。

確実に、ミネルヴァ公爵家を取り込むだけの秘策が。

もちろん、キツシアが裏切ったと言う可能性がないわけではない。ただ、そう考えると問題が出てくる。

ドルバの地を手に入れる必要性である。

いくら力を蓄えたとは言え、領地の価値は大してない。

それこそ、下級子爵家に相応しい程度のものだ。

よって、欲しがるところは少ない。

それこそ、ミネルヴァほどの大貴族が欲しがるとは到底思えない。

もちろん、領地自体には価値はないが、それ以外に何か価値のあるものを狙っているのかもしれない。

けれど、考えても何も浮かんではこない。

館には、それなりに値が張る骨董品も少々はあるが、それでも大した事はない。

それこそ、わざわざそこまで根回しする必要があるものなど一つとしてない。

伝承などに関しても同じだ。

信憑性のあるなしに関わらず、調べ上げても、大した物はない。

それこそ、いわくつきの場所なども存在しない。

よって、今の段階では、裏切りの可能性は皆無なのである。

もちろん、私が見逃している点もあるだろう。

だが、それはこの際、切り捨てる。

それは、よみきれなかった私が悪いだけだ。

その結果として、ドルバ子爵家に取り込まれても仕方がない。

「サレイユ姫様が到着なされました」

もちろん、ただで取り込まれるつもりはない。

全てを自分の目でしっかりと吟味してからだ。

彼女を見た瞬間、私の中での時は止まってしまった。
見るもの全ての時間を食いつぶす。

そんな魔力を持つような女なのだ。

闇夜のように鮮やかで見るもの全てを飲み込んでしまいそうなほど
艶やかな黒髪。

あたかも黒曜石を埋め込んだかのように澄み切った黒瞳。

その瞳で一度でも見つめられてしまえば、その瞬間に萎縮してしま
う。

全てを見透かされている。

そう思わせるだけの力がその瞳にはある。

これがミネルヴァ家。

その存在感だけで一瞬に圧倒されてしまう。

肖像画で見たときは全く違う。

あの肖像画には彼女を何一つ映し出していなかった。

確かに、あそこに写っているのはまさしく彼女だろう。

けれど、あんなものでは彼女を映し出すのにはあまりにも幼稚すぎ
る。

いや、彼女の本質を映し出すなど出来ない。

さすがは、この国の王ですら、ぞんざいに出来ない一族。

いくらしがない下級貴族とは言え、私とて実践を経験した騎士でも
ある。

やすやすとはこうも萎縮する事はないが、それでも、この圧迫感。

気を抜けば、一瞬にして食いつぶされてしまいかねない。

その存在感だけで。

「お初に目に掛かります。ドルバ子爵家当主レイス・フランジェ・
ドルバです」

けれど、いつまでもそうしては進まない。

内心の動揺を隠すようにして、彼女を向かい入れる。

「はい、レイス様ですね。私の名は、サレイユ・ミレ・ミネルヴァ
です。気軽にレイと呼んでくださってかまいません」

そんな私の動揺に気付いていないのか、それとも慣れきったことなのか、微かに笑みを浮かべると軽く会釈してそう答える。

その一つ一つの仕草はどれも洗練されたもので、都会の華やかさを物語る。

けれど、それはどこか退廃的で、なぜか哀愁にも満ちているように思わせる。

「それでしたら、私の事も気軽にレイスとお呼びくださってかまいませんよ」

しかし、それも都会独特のものなのだろう。

ああいった華美な世界は常に隆盛と衰退が交互に押し寄せるものだ。そんな世界にいるからこそ、自然とそうなってしまったのかもしれない。

気にするだけ無駄だ。

「いえ、夫となる方にそのようなお呼び方、出来ません」

それに気にするのは、彼女のひととなりと狙いだ。

それがはつきりとしないと困る。

ただ、今のところ彼女は、この縁談を受ける気ではいるらしい。

まあ、実際のところはわからないが。

あくまでもそう言う形をとっているだけという可能性もある。

「それなら、お気になさらないで下さい。むしろそんなふうに他人行儀にされてしまつては、こちらとしても悲しいです」

まあ、どちらにしろ、こちらとしては否定的な返答はまずい。

情報が少ない現状では、受け流す事が最優先だ。

日が傾き夕刻になると、彼女は屋敷を去った。

本来ならば、もてなす必要があるのだが、今回はそれは延期となった。

彼女の方に次の用事があつたからである。

体よく断るための文句と考える事も出来るが、この際それは切り捨てておく。

彼女はおそらく、無駄な事はしないだろう。

わざわざしがえない下流貴族のところに無駄に足を運ぶ事はない。
話してみても分かった事がある。

彼女はかなり頭がいい。

気を抜けば、確実に負ける。

そんな相手だ。

こんな思いをしたのは、キツシアの時以来だ。

ただ、だからこそ逆に訝しく思う。

これほどまで頭のいい彼女。

そんな彼女がどうしてこんな縁談を受けたのか分からない。

周囲が愚鈍で使えないものばかりだったため、自分が拒否する間もなく薦められてしまった。

そう言うことも考えられるが、彼女がそんな羽目になるような隙を見せるとも思えない。

はつきり言つて余計に謎が深まる。

ただ唯一いえることといえば、確実にキツシアに似ている。

別に容姿が似ているというわけではない。

ただ、纏っている雰囲気だ。

口振りはどこにでもいるような貴族の令嬢。

けれど、纏っている雰囲気は全く違う。

なんとも形容し難いものを纏っている。

そして、それはキツシアも同じようなものだ。

やはり、キツシアはミネルヴァ家のゆかりのあるものなのだろうか。

いや、そういう言い方はないだろう。

確実に、ゆかりはある。

そうそうこんな雰囲気纏えるわけがない。

ある程度予測していたとは言え、少々まズくなってきた。

キツシアが裏切ったとは思わない。

この状況ではまだ、そう思うには、まだ時期尚早だ。

いまだに狙いが分からない状況で、簡単に決断を下すのはまずい。

「お前、ミネルヴァ公爵家所縁の者だったんだな」

やはり、ここでも情報が必要だ。

「はい。分家の分家の者ではございますが、確実に名を連ねておりました」

キツシアは私の問いに対して逡巡する事無く答えた。

当然のことのように。

自明な事を聞かれたように。

もちろん、通常ならば、ここでは真偽のほうを確かめなければなら
ないだろう。

けれど、キツシアは決して嘘はつかない。

いや、単に私が気付いていないだけのかもしれないが、私の中では
確実に今までついた事はない。

それに、嘘をつく必要性などないのである。

私の問いが確実に確認のものでしかないからである。

「そうか。ミネルヴァ家の者は、大抵あんな感じなのか？」

『なぜ言わなかったのか？』

そんなことは聞かない。

聞いても意味はなさない。

答えはわかっている。

『貴方様がお聞きになりませんでしたから』

これ以外にありえない。

それに、もっと重要な事がある。

ミネルヴァ家の人間性について知っておかなくてはならない。

それによって、動き方を変えなくてはならない。

「はい」

それに対して、キツシアは簡潔にそう答えた。

こんな答え方をしたということは、まだ何かあるのだろう。

ただ、聞いても無駄だろうが。

自分の口からは言えないから、そう答えているのだろうか。

「そうか……」

それにしても、正直やりにくい。
彼女のような人間ばかりがいる。

まさしく状況としては最悪だ。

彼女一人なら、まだなんとか対等にやりあえるかもしれない。

いや、こんなところで見栄を張ってしまっても無駄か。

はつきり言えば、彼女一人ですら、自分の手におえるのか分からない。

確実に、彼女はまだ自分の手のひらを全く見せていない。

正直言つて、かなり分が悪い。

だというのに、さらに彼女のような人間が増える。

はつきり言つて、確実に負ける。

まだ、彼女一人だけか、または、数人程度で後は、大した事はない。
そついうのなら、どうにかできるかもしれないが、この状況では完全にお手上げた。

足を引っ張り合いさせて、内部から切り崩せない。

一枚岩とまでは言わないが、確実に、私とやりあうとなれば、完全に一丸となってくるだろう。

活路が到底見出せない。

「もう一度聞く、この縁談は、ドルバ子爵家のためにあるのだな？」
ただ、唯一の救いというのが。

「はい、当然です。」

このドルバ子爵家のためになるということだ。

もちろん、嘘である事を考えなくてはいけないが、やはり可能性は薄い。

理由は、以前言つたとおりだ。

それに、そんなことよりもっと別の事を気にしなくてはならない。

ドルバ子爵家のためになるとはいつても、家を存続させるとは限らないからだ。

ドルバ子爵家はここで取り込まれるのが最もいい。

だからこそ、この縁談はドルバ子爵家のためになる。

そういう意味での答えだということもありうるのだ。
それを忘れるわけにはいかない。

もちろん、ミネルヴァ公爵家を逆に取り込む。

そうとも言っていたが、そうしようとはしましたが、旦那さまの力不足で逆にそうなってしまうた。

私の思惑通りに動かなかった。

それだけのことです。

そういわれてしまえば、なんとも言い返しようがない。

そうなれば、キツシアは一言も嘘をついていないのだから。

全ての可能性を考えておかなくてはならない。

そうでなくては、確実に自分が望まない方向へと向かう。

それだけは、どうしても止めなくてはならない。

それから何度かまた彼女と会った。

もちろん、それにかこつけて彼女の家も訪れた。

彼女の家の人間の観察だった。

もちろん、最初から期待はしていなかった。

むしろ確認のために行ったでしかない。

周りの人間の能力を。

けれど、これがなんとなくまくいったのだ。

だいたい彼女の家の力の構図が分かった。

頭の切れに関しては彼女が一番だった。

まあ、だからといって、油断できる相手でもなかったが。

それでも、彼女以上のものがないと言っただけでも、十分安心材料だ。

もちろん、彼女以上の人間は、隠れていたたり、本性を隠してただけの可能性もあるが、それはこのさい抹消しておく。

時間が足りなさ過ぎるからだ。

縁談の話がうまく具合にどんどん進んでいつているのだ。

向こうは最初から乗り気であり、それに合わせるようにして、私は

彼女に会いに行っている。
進まないほうがおかしい。

最近では、式の日取りをそろそろ考えては、などという話も出てきている。

もちろん、今の状況では領けないので、適当に濁しておいたが、それにだって限度がある。

いつまでも、ごまかしは効かない。

だから、そろそろ狙いを探し出さないといけない。

けれど、それでも、やはりうまく絞りきれない。

ある程度、予測は立てているが、どれも最後の押しが足りない。
今のところ考えられる可能性は三つ。

一つは、彼女が私に一目ぼれをした。

二つは、彼女を私のところに嫁がせることによって、家をのつとるため。

三つは、婚姻関係を結ぶことによって、強制的に開戦される戦の最前線に向かわせる。

けれど、この三つにはやはりどうもこれだというものはない。

一つ目は、彼女の私を見る目を見たら分かる。

あれは、恋した女性の目ではない。

それに、それだけならば、周りが反対することはまず間違いない。

二つ目は、彼女の家に行ってから思い浮かんだことだ。

彼女の頭の切れは抜群だ。

そして、周りもまた同じくだ。

彼女ほどにないにしても、抜群の切れを持っている。

よって、何人か協力すれば、彼女を追い出すことは可能だ。

だが、やはりこれも最後の押しが足りない。

彼女が乗り気だと言うことだ。

彼女はこの縁談に乗り気である。

もし、周りからの陰謀なら、全く逆のはずだ。

もちろん、なんらかの弱みを握られているため。

そういうことも考えられるが、それでも、心の機微が少しぐらい出てきてもおかしくない。

けれど、彼女は、それを全く出していない。

よって、これも、却下される。

そして、最後。

これは、最近耳に入ってきたことだ。

ミネルヴァ一族が今度の戦に出撃命令が出ている。

そのための戦力強化。

そうとも考えられる。

今更ちまちまと増やしていくよりかは、一気に吸収してしまうほうが楽だ。

それに、先鋒を私のところにしてしまえば、損害も少なくてすむ。だからこそ、力はあっても、簡単には縁談を断れない私のところに来た。

そういうものだ。

けれど、もちろん、これにだって問題はあある。

それは、今回の戦に出撃命令が出ているのは、ミネルヴァ一族だけ。他には手出し無用となっている。

もちろん、ミネルヴァ一族で十分勝てる。

それは、決して向こうが弱いのではなく、ミネルヴァ一族が強すぎるだけのことだ。

とはいえ、それでも大損害が出る。

それは周知の事実だ。

そして、それを分かっている国王がどうして、そういったか。

それは、ミネルヴァを潰すためである。

ミネルヴァの影響力ははつきりいって、最強だ。

それが国王にとっては邪魔なのだ。

それを消し去る、そのためにこんなことをしているのだ。

そして、そんな状況下で、私を参戦させることなどできない。

もし取り込もうとすれば、その瞬間にたたかれてしまうことは間違

いないからである。

まあ、もちろん、力でねじ伏せば構わないかもしれないが、そんな力技を彼女たちがするとは考えられない。

そんなにイヤならば、いろいろと方法があるはずだ。

無茶なやり方はきつとしない。

よって、この可能性も消える。

まあ、現状はこんな感じだ。

まったく進んでいない。

「旦那様。サレイユ姫様が起こしになりました」

と、それはいいとして、どうやら、約束の時間が来たらしい。

「分かった。応接間へ通してやってくれ」

私は立ち上がると、キツシアにそう答えた。

そして、私とレイの婚姻が決まった。

もちろん、彼女のほうが私のところに嫁ぐ。

それはつまり、まず、つぶれることは無かった。

もちろん、取り込まれると言う可能性が残ってはいるが、それでも、家が断絶することはない。

それが、いいか悪いかとは別に、ドルバの名が消えることは無くなった。

ただ、それと同時に厄介なものを抱えることになった。

通常、婚姻の場合、嫁ぐほうが持参金を持つてくる。

つまり、今回は、彼女がドルバに嫁いでくるので、この場合、彼女が持参金を出す。

そして、その持参金の問題だったのだ。

彼女の持参金、それは・・・

ミネルヴァ一族が持つ領地全てだったのだ。

その話が決まった翌日に全てが分かった。

いや、聞かされたというほうが正しいかミネルヴァ一族の正体を。

錬金術。

それはあらゆる物質を己が思うままに変化することができる、禁断の神の魔術。

そして、それを扱う一族がミネルヴァ一族。

それは、貴族ならば誰でも知っている話だ。

けれど、それはこの本質とは全く違っていた。

禁断の神の魔術なんか存在しない。

むしろ、それは・・・

悪魔の呪いだっただ。

私は、隣を見る。

そこには、レイの姿がある。

ミネルヴァ公爵家の屋台骨でもあるカッスラー。

肥沃な大地と豊かな水に恵まれた、王国でも屈指の穀物庫。

そして、そこよりもずっと奥に行った場所。

カッスラーよりもっと奥の世界。

荒野の大地。

ニルベルツシュ。

ミネルヴァ一族の根源と為す世界。

そこに、私とレイはいる。

呪いの根源を砕くために。

そう、錬金術はただの呪い。

自分の触るものを変質させてしまうのだ。

そこには、自分の意思は介在しない。

勝手に変質させてしまう。

そして、それと同時に破壊する。

血の耐性を持つもの以外に触れることは決してできない。

血の耐性を持つ物以外に触れたなら、それは、やはりその瞬間に変質してしまうから。

消えてなくなってしまうから。

私は、剣を抜くと、目の前に現れた、異形の者を切り捨てる。

やけに甲高い断末魔を残したそれは、それっきり動かなくなる。

『宝剣グレイプニル』

その昔、まだ神がこの世界と交流していた頃に、残していった聖剣だという伝承が残っている。

私は、これを受け取った。

呪いをかけた者を殺すべく。

そう、ミネルヴァ一族との縁談の本意はここにあった。

私も知らなかった真実。

ドルバの血の真実。

それは、純粋な血を守り続けたミネルヴァ一族。

呪いをうけず、綺麗な血であり続けた一族。

それがドルバ。

そして、その嫡男であった私に白羽の矢が立ったのだ。

その私の教育のためにあてがわれたのは、キツシア。

そして、私はここにいます。

全ての現況を消し去るために。

キツシアは言った。

この縁談はドルバのためだと。

それは、事実だった。

この縁談を受けなければならなかった。

終止符を打たなくてはならないから。

これ以上、ミネルヴァ一族は肥大していつてはならない。

ミネルヴァ一族の力は強大な故に、破滅を呼ぶ。

絶対的な力を持つ物の存在は許されないのだ。

絶対的なものの存在はやがて、欲を肥大化させる。

肥大化された欲は、全てを飲み込み、そこには、何も残らない。

何も生み出されない。

全ては終焉へと導かれる。

だからこそ、この縁談はドルバのためなのだ。

ドルバも終焉へと巻き込まれるから。

だから、私は今ここにいる。

奥へ行けば行くほど、異形の者の数が増えてくる。もういったいどれほど斬ったのか分からない。

それこそ、この剣を持っていなければ、体力切れで倒れてしまいかねないほどだ。

神からの祝福を受けているから。

彼女は言った。

異形を切れるのは今のところ、この剣だけだと。

神の一振りだからこそ、斬ることが可能なのだと。

そして、この剣を使えるのは、ミネルヴァの血を受け継いだものだけど。

しかも、呪いを受けていない純粋な血を持ったものでないと。

呪いによって、力が相殺されるから。

だから、使えるのは私一人。

唯一純粋な血を持った一族の者だから。

最後の一匹を薙ぎ払うと、立ち止まる。

目の前には大きな石碑が佇んでいる。

「これが、元凶か」

それをみて、思わずポツリと、つぶやくと、横にいる彼女はこくりと頷く。

その石碑自体が、呪い。

この石碑を砕かなくてはならない。

けれど、砕けばいいわけではない。

元に戻してから出なくては意味はない。

この石碑は変化させられたもの。

皮肉にも、呪いのおかげで、元凶を封じたのだ。

彼女がそつと石碑に触れる。

石碑は騒がしく音を鳴らす、やがて姿を変質させていく。

先ほどまでいたものと同じく異形のもの。

けれど、先ほどまで以上に醜態な姿。

見るものの全てに生理的嫌悪感を抱かせる存在。

私は剣を構えると、

「はあ！！！」

気合の声と共に間合いを一気に詰める。

異形の者は、そんな私を見下ろすと手をかざす。

「呪いを放つ気です！！！」

後ろにいるレイが悲鳴のようにそう叫ぶ。

けれど、私はそれを体をひねることでもかわすと、突き出されている手をまず切り落とす。

『ぎいやああ！！！』

そのとたん異形が悲鳴を上げる。

切り口からは、緑色の液体が吹き出ている。

その液体に触れた大地は腐っていく。

この大地が荒野と化してしまったのは、どうやら、この異形のせいのようなのだ。

私は、いまだ声を上げ続けている異形の首を掴むとそのまま押し倒す。

その際服に液体がこびりついたが、さっさと脱ぎ捨てることで済ませる。

そして、その剣を胸につきたてる。

『ぎいやああああああああ！！！』

それと同時にあげた異形の悲鳴は、ほとんど凶器だった。まるでマンドラゴラを抜き去ったとき同じようなものだ。

私は、それに耐えながら、

「グレイブニルよ、今ここに浄化の光を！！！」

そう声高に叫ぶ。

本体であるこの異形は、斬るだけでは足りない。

浄化までしなければ、終わりではない。

呪いの除去まで考えればそうなるのは、当然だ。

『ああああああああああ！！！』

断末魔の声が辺りに充満する。

凶悪な声。

鼓膜が裂けそうなほどの凶悪な声。

必死にこの地にしがみつこうとする醜態な声。

『あああああああ……!!』

けれど、その声もついに途絶える。

完全に消え去っていた。

異形の姿は。

「終わったのですか？」

剣の汚れを先ほど脱ぎ捨てた服で拭くと、鞘に戻し、振り返ると彼女はこわごわとそう尋ねる。

頭の切れるとはいえ、やはり女性は女性、こういう体験したことなど無かったのだろう。

恐怖感が抜け切れてないのは仕方ないだろう。

「ええ、無事に。その証拠に」

私は、そう答えると、手袋をはずすと、彼女の手に触れる。

驚いたように、引っ詰めようとするが、私はそれを離さなかった。

それが証だからだ。

彼女の、ミネルヴァ一族の呪いが消え去ったことの。

翌年、私とレイの婚儀が行われた。

それは、とても華やかな物だった。

今まで呪いに苦しんできた者達が、開放に酔いしれていた。

そして、ミネルヴァ公爵家は解体された。

解体された後は、もちろん、ドルバ家に吸収された。

それと同時に、爵位も取り上げられることになった。

呪いを抜いた後に起きた戦で戦功を立てたからである。

そして、それと同時に、今回の婚儀での領地拡大。

それによって、私たちドルバ家は、伯爵と名乗ることを許された。

まあ、本来、領地の贈与は許されてはいないのだが、ミネルヴァの

特例。

消えたのろいの存在を知らない王国は、ミネルヴァの力を恐れ、しぶしぶ了承したのだ。

それに、今の王国の事など、正直興味はない。にらまれようがどうしようが、関係ない。

私は革命を起こす。

この腐った王国を再建するために。

その手はずも着々と進んでいる。

「旦那様。デイル殿下との会合の時間です」

キツシアの私を呼ぶ声が聞こえた。

全ては着々と進んでいく。

折角手に入れた力。

それを使わなければ、もったいない。

私は、思わず微笑する。

「レイス様？」

それを見て、訝しがるのは、レイ。

今の彼女に、あのときの鋭さはない。

けれど、それも必要ないだろう。

彼女は、もう呪いに苦しむことはない。

無駄に考える必要などない。

ここから先は、私だけで十分。

「私は、これから国を変える。くだらない王にくだらない王国。そんなものは、存在させない。そんな私を支えてくれるかい？」

そう、彼女にはそれだけでいい。

私をそつと支える。

それだけでいい。

「はい」

それに対して彼女は頷き答える。

その一声で力が沸く。

これが夫婦と言うものなのかもしれない。

キツシアに感謝しなくてはならないのかもしれない。

「ありがとう。それじゃ、行ってくる」

そして、私は殿下の元へと向かった。

「私たち一族に平和をもたらしたように、この国にも平和を」
レイのその言葉を背に受けながら……

（後書き）

うーん、長くなりすぎたなあ……
でも、割かし、こづいづのって好きなんだよねえ。
書くのは疲れるけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0168d/>

呪の一族

2010年10月14日21時25分発行